

漱石式

映画文学人生論

036) 草枕	夏目漱石	参考；奥の細道	松尾芭蕉
037) 野分	夏目漱石	参考：坊っちゃん	監督 前田陽一
038) 夢十夜	夏目漱石	参考：夢	監督：黒澤明
039) 坑夫	夏目漱石	参考：青春の門	監督：浦山桐郎
040) 門	夏目漱石	参考：晩春	監督 小津安二郎

文学詩歌は詮なきなり

寺山修司原作・監督の映画『書を捨てよ町へ出よう』の公開は一九七一年、緒方明監督の映画『いつか読書する日』の公開は二〇〇五年。

二つの映画の公開時期は、私自身の年齢でいえば、三十代前半と六十年代半ば、文学、読書の空白期にあたる。時代の思潮と個人の行動パターンがほぼ一致している。

その空白期に読書をまったくしなかったわけではない。たまたま『正法眼藏髓聞記』を読んだことがあるが、それには「文学詩歌は詮なきなり」とあった。しかし、道元にならって只管打坐に専念する気にはなれなかった。

映画『いつか読書する日』は、NHKのドラマ『おしん』の主演を演じたことがある田中裕子がいつのまにか五十歳になり、牛乳配達とスーパーのレジ係で多忙な日々を送りながら、いつか読書する日を楽しみに生きている女性を演じていた。人生五十年なら、その日はこないが、人生八十年ならやってくる。ヒマに恵まれた私は、夏目漱石の未読作品を読みはじめることにした。

草枕 夏目漱石

野分 夏目漱石

夢十夜 夏目漱石

坑夫 夏目漱石

門 夏目漱石



映画文学人生論

漱石 貳

『草枕』は冒頭の文章は暗記しているが、難しい漢字が多用されていて、読みにくく、結末まで読み通したことがなかった。『夢十夜』も一通り読んだことはあるが、よくわからなかった。『野分』『坑夫』『門』はまったくの未読。この機会に、あらためて挑戦するつもりで、難解な『文学論』を参考にしながら読んだ。

よくわからないが、『草枕』は非人情の立場、『野分』は文学者の人格、特に金銭に対してとるべき姿勢をとりあげ、『夢十夜』は意識というよりも無意識における集合的F（焦点的印象または観念）、『坑夫』は意識の流れという文学の方法を実験的に採用しているようだ。

『門』は一読しただけでは、文学論とあまりかわりがなさそうに見えるが、書を捨てて、文学との縁をたちきり、非精神的な生活を送らざるをえない人物の煩悶を描くことによって逆説的に文学論の応用になっているともいえる。

主人公の宗助は一週間のうち六日半は役所勤めをしているが、それは非精神的な行動で、いかにもつまらなく感じられたという。食うために働いていると、読書をする余裕もなくなる。

『それから』の代助は高等遊民で、「食うための職業は誠実にできにくい」というが、『門』の宗助はそんな暢気なことはいえない。

食うために生きて詮なきキリギリス